参考資料：岡山縣上道郡古都村史、『岡山市の地名』著者岡山地名研究者
岡山史蹟めぐり（岡山市立西大寺公民館古都分館）

宿（しゅく）村　（現、古都宿）

宿は守戸（しゅこ）で古墳の守戸であるとの説もあるが、宿場の宿とも考えられる。
山陽街道も昔から現代にいたるまで度々改変があったらしく、街道筋には所々に宿駅が設けられ、道行く人の宿泊その他の便宜が計られていた。
宿は２つの道の合流点としての要であり、宿駅が設けられたのも当然のことといえる。市場と称し相当広く、毎月、日を定めて市場を開設していたと思われる。
今でも、「市場」という小字名が残り、部落の中央を東西に道路が貫通しわずかに宿場町の形をあらわしている。

『温故秘録』によると「古へは当村は西国の海道駅になりしによりて宿といふよし、宇喜多秀家卿の時、往来道筋替りて今の通りになりたいといふ」とあり、鎌倉、室町時代の山陽道の宿場にちなんで村名にしたようである。

『慶長十年備前国高物成帳』には古津庄宿村と記されている。
※『備前国高物成帳（びぜんこくたかものなりちょう）』とは、慶長 10 年（1605）に備前国で作成された年貢帳のこと。

『備陽記』によると、枝村として新屋敷があり正保～享保年間（1644～1736）に成立した新しい村。

明治 22 年(1889)6 月	宍甘、藤井、鉄、南方の４ヶ所と合併して古都村となった
昭和 28 年(1953)2 月	町村合併で西大寺市に編入合併され宿は大字名になった

地区内では背後の丘陵を開いて畑とし、ぶどうなど果樹の栽培が盛んである。
JR 山陽本線東岡山駅、国道二号線に隣接しているため、岡山方面への通勤者も多く、宅地開発も進んでいる。